

文章を読む9

前回の続きです。(r)で最初の「御」は当然

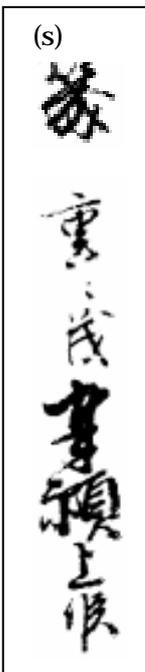


として、**耳**をよく見ると、中の**耳**に「耳」という字が見えると思います。「耳」の周りの**門**は「門」で、今でも略して書く人は多いでしょう。次の**海**は虫食いと重なって読みにくいですが、よく出てくる言葉で「**海**」に「齋」という字です。3字合わせて

「**御聞濟**」となります。**海**は単独では難しく、次の**巾**と**垂**を合わせて考えると、「被下置」(**下**し**置**かれ)となる、とわかれば、かなり成果が上がってきています。次の**候**も「被下置」ときたから「候」?とわかれば、慣れてきた証拠です。

次の**様**は、よく出てくる字です。よく出てくるので崩し方もひどくなっていて、これは「様」という字です。「様」は前回までに何度か出てきましたが、前回まではそんなに崩してありませんでした。今回の**様**はよく出てくる崩し方なのですが、やや色が薄かったので、次に出てくるときには再度解説します。

慣れてくると最後の5文字は字の全体の感じを見て、「被下置候様」という仮説を立て、それぞれそれに相当なくずし字かどうかを確認するという感じで読み進めることとなります。(r)は一つながりのイディオム(熟語)のようなものなので、まとめて書くと「御聞濟被下置候様(お聞き済み下し置かれ候様)」となります。



(s)は、最後の4文字から読みましょう。**奉**を「奉」と読めればあとは簡単でしょう。「奉願上候」で「願上げ奉り候」となります。では、前半はどうでしょうか。(r)の次が(s)ですから、「お聞き済み下し置かれ候様願上げ奉り候」となるわけです。これを頭に入れながら、読みます。

奉は難しいので飛ばし、**重**がポイントですが、**重**という感じが読めれば「重」? 「**奉**重」で字の感じから「幾重」と読めるかもしれません。

次の**茂**より次の**茂**の方がわかりやすく、これは「茂」という字で、ひらがなの「も」の代わりに使います。したがって**二**は「二」で、「幾重二茂」(幾重にも)となります。

